

(別紙様式3)

## 博士論文要約 (Summary)

平成 26 年入学

人文社会科学部 地域政策科学専攻

氏名 松崎 大嗣

タイトル	成川式土器の研究
<p>九州南部は本土最南端に位置し、古墳時代には古墳築造の南限域、中央集権国家を目指した古代国家形成期には周縁地域として位置づけられる。近畿地方などの政治的中心地域から見た場合、本土最南端という地勢的特徴による辺縁性、人類活動がみられる以前から活発に活動する火山噴火によって形成された生産性が低い地形、土壌墓などの墓制からみた階級未分化な社会像、文献に登場する隼人など、当地の古代社会像を復元する際には、どうしても上記のようなネガティブなイメージがつきまとう。しかし、視点を南へ向ければ、南西諸島との交易や交流の玄関口であり、先史時代から活発な交易活動が行われてきたことが明らかとなっている。</p> <p>このような地理的環境にある九州南部において、「成川式土器」という土器が製作・使用される。成川式土器とは、九州南部の古墳時代から古代初頭の在土器様式の総称であり、脚台がつく甕、突帯がつく甕や壺、形態バリエーションが豊かで、丹塗が施される埴や高杯などが特徴的な器種として知られる。概して、弥生土器の伝統を古代まで存続させていることに特徴がある。古墳時代の素焼きの土器という観点から見れば、それは「土師器」と呼べるかもしれないが、とくに古墳時代後期以降の成川式土器は、特徴的な器種が多く、ある程度の斉一性をもった土師器とは器種構成や製作技法、使用方法などにおいて異なる点が多い。</p> <p>成川式土器は、鹿児島県指宿市山川に所在する成川遺跡を標式遺跡とし、九州南部（鹿児島県、宮崎県南部、熊本県南部）に分布する土器である。これまで編年研究を基礎とした多方面からの土器研究が実施されており、成川式土器の研究は、九州南部の古墳時代から古代社会の復元研究には欠かせないものとなっている。</p> <p>上記のように、列島における古墳時代の中でも特徴的な土器を使用してきた九州南部の人々だったが、やがてその伝統も失われるようになる。先行研究では、成川式土器が終焉を迎えるのは、7～9世紀を中心とした時代に、ある程度地域差をもちながら土器様式の崩壊を迎えることが指摘されている（下山1995）。</p> <p>当該期は、古代国家形成期にあたり、中央集権的な国家体制を樹立するために、内外において様々な諸変革が起こった時期である。軍事と対外関係、律令制の導入、宮都の整</p>	

備、官僚制の成立、仏教文化の流入など大規模な社会変化が起きた。政治的中心地から遠く離れた九州南部の地においてもそれは同様であり、大宝2年(702)に薩摩国、和銅6年(713)に大隅国が日向国から分かれて建国されており、8世紀初頭ごろから九州南部においても様々な社会的・政治的・文化的変化が起こったとされる。

とくに、当該期に九州南部に居住した人々は「隼人」と呼ばれており、政治的中心地から異民族視される対象であった。文献資料からは『続日本紀』和銅7年(714年)三月壬寅条に「隼人昏荒、野心未習憲法。因移豊前国民二百戸、令相勸導也。」とあり、隼人への律令制の導入が円滑に進まなかったことから、豊前国から200戸の移民が行われたことが記されている(永山2009・2011)。また、当該期の九州南部の社会は、国制施行へ反発する九州南部の人々と朝廷との間でいくつかの争いが起きるなど(中村<sup>明</sup>1998, 永山2009)、不安定な社会が営まれていた。

そして、成川式土器の終焉は、上記の社会変化が進行した時期に起こったことが考えられており、その背景には、単純な土器様式の変化だけでなく、様々な要因が考えられてきたが、いずれも文献史学の研究内容を援用したものであり、考古資料を用いた実証的研究にもとづいて成川式土器の終焉プロセスを説明した研究はなかった。

そこで、本論文では、成川式土器が終焉を迎えるプロセスを考古学的に解明することを目的とする。成川式土器は古墳時代から平安時代前半期まで存続期間の長い土器様式であることから、まずは研究の基軸となる土器編年を提示した上で、土器調理技術の復元や火山灰の年代推定、窯業生産の成立と展開、古代集落との様相比較といった成川式土器とそれに関わる関連諸分野を駆使して分析を行う。最終的には、成川式土器の終焉プロセスと九州南部の古代社会成立プロセスを比較することによって、古代国家形成期における九州南部古代社会の特質を明らかにしたい。

第1章では、大正時代から始まる成川式土器を中心とした九州南部の古墳時代～古代の土器研究を整理した。その中で、成川式土器は、地域差を持ちながら7～9世紀の間に終焉を迎えることが考えられており(下山1995, 中村2015)、後続する土師器に変化することが推測されてきた。しかし、「成川式土器の終焉」プロセスを実証的に解明した研究はこれまで無く、終焉を迎える様相や社会変化の実態は不明瞭であった。7～9世紀の社会変化プロセスの様相が不明瞭な理由として、①7・8世紀に位置づけられる遺跡数の寡少性、②年代を推定するための指標となる成川式土器の形態変化の緩慢さをあげることができる。在地土器様式である成川式土器から、古代の土器様式へ移行する背景には大きな社会変化が予想されるが(吉本2006、中村<sup>直</sup>2009)、当該期は在地土器編年が未確立であるため(川口2018)、その移行の様相を明らかにすることができない。九州南部の不明瞭な古代社会を「謎の7世紀」(中村<sup>和</sup>1996 : p. 188)、「空白の奈良期」(中島2010 : p. 43)などと呼ぶこともある。

そこで、九州南部の古代研究と成川式土器研究のすり合わせが必要である。本論では「成川式土器の終焉プロセス」を解明するために、以下の4つを研究の大きな柱とする。

4つの柱とは、「成川式土器編年の整備」、「成川式土器を用いた調理技術の復元」、「敷領式の年代解明」、「九州南部における窯業生産の成立と展開」である。最終的には、これらの議論を総合的に解釈し、古代集落の動態と比較することで、成川式土器終焉のプロセス解明を目指す。

第3章では、本論で使用する時間軸の基盤を構築するために、成川式土器の分類と編年をおこなった。対象資料は、九州南部における95遺跡から出土した成川式土器を中心に扱う。本章における九州南部とは、鹿児島県本土域を中心とした地域を指し、一部熊本県南部や宮崎県南部の資料を用いることがある。対象時期は弥生時代後期から平安時代前半期までを取り扱い、中村編年の松木菌式・高付式から笹貫式新段階を対象とする。

分析方法について説明する。まず、中村編年が提示された段階では資料数が少なかったことから検討できなかった「系統」に着目して形式分類を実施する。土器の分類については属性分析という方法を用いる（田中1982, 田中ほか1984, 中村<sub>直</sub>1987, 中園1991など）。属性分析とは、「属性を個々の単位に分解して資料操作を行う方法」（横山1985）であり、「個々の属性はそれ自体で単独に共存できず、諸属性は互いに結合してはじめて一つの個体をなす」（横山1985 : p. 69）という性質を利用する。属性とは考古資料そのものに備わる性質や特徴のことである。土器で言えば口縁部形態、胴部形態、底部形態などを指す。ただし、研究の目的や方法が異なると、調整技法や装飾、色調などに着目する場合もある。本論では時間的変化を有効に示すと考えられる属性に着目する。

分析の作業工程は、考古資料に見られる複数の属性を取り上げ、属性間の関係を検討するという順序で行う。具体的には、あらかじめ各属性において属性変異の型式学的組列の方向を推定するという作業を施したうえで、マトリクスを使って相関を検討するという方法である（中園1991 : p3）。

次に、各属性の組み合わせ頻度の多寡を相関表から読み取り、型式や型式組列を設定する。型式とは同じ形式に属する物を形質的特徴によって細分した分類単位のことであり（横山1985）、様々な属性の組み合わせにより成り立つものである。ただし、すべての属性がそろった資料は多くないため、本論における型式分類については、口縁部形態を基準とする。

その後、各型式のまとまりや同時代性を読み取るために、遺構から出土する資料を対象として、共伴関係などを参考にしながら共時性が担保できる資料群を抽出し、様式を設定するという方法をとる。様式とは様々な型式組列を横断し、類似する特色を手がかりに型式を組み合わせたもので、時間的な同時性や一定の地域的空間を占めるまとまりのことである。それが実態として確認できるのは、厳密に同時代性が確認された一括遺物であり、様式の実在を検証することができる（田中1978）。以上の認識に立った上で、各様式の年代的位置づけや併行関係を明らかにするために、外来系遺物などをもとに、隣接する周辺地域の土器編年を用いた交差年代決定法によって相対年代を検討する。

以上の作業を通して、松木菌式・高付式→中津野Ⅰ・Ⅱ式→東原Ⅰ・Ⅱ式→辻堂原式→笹

貫Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式→敷領式という10期編年を提示した。以下、それぞれの様式ごとに解説する。

高付式は、近年大隅半島の調査事例が増加したことから資料蓄積が著しく、瀬戸内系土器とも共伴することから、弥生時代後期前葉から中葉に位置づけることができる。これに後続する土器は、井手上A遺跡や高久田遺跡で確認することができるが、具体的な年代を知る手がかりがない。そのため、高付式を新古の関係で分離することは難しいため、この点は今後の課題としたい。

高付式と同時期とされる松木菌式は、近年資料が蓄積されており、弥生時代後期初頭から前葉の時期が考えられる。その後、後続する土器は型式学的には確認できるが、明確な時期区分が可能な資料は今のところみられていない。そのため、高付式と同様、松木菌式も弥生時代後期～終末に位置づけられる土器様式と捉え、将来的に細分されることが望ましい。

中津野Ⅰ・Ⅱ式は、近年の型式学的検討(久住2015)により、その年代がこれまでの「弥生時代終末から古墳時代初頭」という認識から下がり、古墳時代初頭から前葉に位置づけられることがわかってきた。その一つの要因として、薩摩半島西岸域を中心とした芝原遺跡などの拠点的な遺跡において、外来系遺物との共伴関係が確認できるようになってきたことが大きい。そのため、型式学的な分類と外来系遺物の年代観がおおよそ整合性をもっていることが明らかとなり、古墳時代前期初頭から中期前葉を中津野Ⅰ式から東原Ⅱ式の4段階に区分できた。また、続く辻堂原式の段階から須恵器との共伴例が確認できることから、辻堂原式は古墳時代中期中葉ごろに位置づけられる。

成川式土器編年の中でもっとも大きな変化が起きるのが笹貫式である。笹貫式の段階に入ると、甕は口縁部形態が内湾気味を呈し、全体形がバケツ型になり、壺も幅広突帯を有する資料が増加する。また、埴F類や埴S類も原型となる布留式系や瀬戸内系の小型丸底壺から大きく変容し、サイズも大型化するなど在地のデフォルメが著しくなる。概して、「成川式土器」の特徴はこの笹貫Ⅰ式段階からの様相であり、成川式土器をもっとも特徴づけている段階であると言える。

先行研究では新出資料が相次いだことにより、笹貫式の年代幅が大きく下る結果となっていたが、中村直子による型式学的検討(中村直子2009)により、新古の関係が示されたことは既に述べた。本論でも中村の分類基準を参考にしながら、分類を行った結果、笹貫式を3つの段階に分けられることがわかった。

笹貫式の中でもっとも大きな変化としてあげられるのが、笹貫Ⅱ式である。まず、土器分布圏の狭小化である。笹貫式以降の成川式土器分布圏の変遷過程をみると、笹貫Ⅰ式段階までは、鹿児島県全域に分布していたが、笹貫Ⅱ式段階から、土器様式の分布が大きく志布志湾沿岸地域と鹿児島湾沿岸に偏ることがわかり、北薩地域や薩摩半島西岸域では笹貫Ⅱ式の分布がほとんど見られなくなることがわかった。この土器様式圏の狭小化は、続く笹貫Ⅲ式、敷領式にかけても続く現象で、成川式土器は笹貫Ⅱ式の段階を画期にその

分布圏を大きく狭めていることがわかった。

二つ目に、新器種の増加があげられる。笹貫Ⅱ式段階から、須恵器高杯を模倣したと考えられる高杯D類や、甗、折衷甗が土器様式の中に加わっている。とくに、甗については大隅半島域で多く確認されており、そのほとんどに笹貫式甗にみられるような突帯を有している点に特徴がある。筆者はこのような甗の発生を九州南部特有の現象と考え、これらの資料を「九州南部型甗」と呼んでいる（松崎2020）。

以上のように、笹貫Ⅱ式はその分布圏を狭めながらも、須恵器を模倣した器種や隣接地域の土器様式を模倣して新たな調理技術を在地土器様式へ組み込んでいる点などに特徴があるといえる。ただし、笹貫Ⅱ式段階において、鹿児島湾沿岸の中でも指宿地域だけは、高杯D類や甗は出現しない。これらの現象が、続く笹貫Ⅲ式を特徴づけている。

笹貫Ⅲ式になると、先述した分布域がさらに狭小化し、指宿地域と志布志湾沿岸地域に限定されるようになる。また、器種も甗13・16類と高杯F類に限定されるようになる。そのため、一見、器種の減少により、使用する土器が減ったようにみえるが、供膳具類は土師器・須恵器の杯類が普及し、使用されるようになる。そのため、在地土器様式の中でも煮炊具を除き、供膳具だけは在地生産ではなく、外来系器物を取り入れている可能性がある（下山1995）。

甗については、笹貫Ⅱ式に見られたようなまばらな刻目をもつような甗は志布志湾沿岸だけに限定され、指宿地域では粗雑に貼り付けた不整形突帯が貼りつけられる。さらに、指宿地域では先述したように甗などの蒸す調理に必要な器種はなく、笹貫Ⅰ式から続く古墳時代的な甗を使用していることから、志布志湾沿岸地域と地域差があることがわかる。

敷領式は現在のところ、敷領遺跡と橋牟礼川遺跡で確認でき、指宿地域でも南部だけに分布する限られた土器様式である。敷領式の特徴は先述したとおりだが、器種は甗に限定されることが特徴で、他の器種は当該期の隣接地域と同様に、土師器・須恵器の杯類、須恵器貯蔵具など、律令制期の土器様式が用いられている。ただし、甗だけが在地色を残しているのではなく、土師器の丸底甗も導入しながら、在地伝統的な脚台付きの甗を用いているため、相互補完的な関係とも言い切れない。むしろ、調理の内容などによって使い分けを行っている可能性もあり、両土器様式が併存していた状況を示していると言える。

敷領式の段階は、丸底甗に対応する竈付住居が導入されており、竈は脚台甗と相反する調理施設であると考えられてきたが（平田1979）、それらが共存する形で調理様式が形成されていた。そのため、成川式土器の終焉は竈の導入に寄って引き起こされたとの説もあったが（平田1979）、近年の資料蓄積により両者は共存していることが明らかとなった。敷領式は、8世紀後半～紫コラ火山灰層が堆積する西暦874年までの土器様式であり、紫コラ上層からは、現在のところ成川式土器は出土しない。紫コラ上層の様相を知る手がかりは、指宿市の北部に位置する中島ノ下遺跡や宮之前遺跡で確認することができる。特に宮之前遺跡では、紫コラ火山灰層の直上から10世紀中頃に位置づけられる土師器杯や須

恵器、墨書土器、開元通宝などが出土しており、紫コラ火山灰層直下層でみられた敷領式の様相は確認することができない。

そのため、敷領式は開聞岳貞観噴火によって途絶した可能性が高く、古墳時代初頭から続く成川式土器の伝統は終焉を迎える形となった。この土器文化の終焉は、噴火によって人々が死滅して引き起こされたというわけではない。その理由として、噴火後に周辺住民が亀卜を求める記述が『日本三代実録』中に記されていること、敷領遺跡では火山噴出物層を除去した「災害復旧痕跡」が確認されていることなどがあげられる（鷹野2014）。当地の人々は噴火時には一度避難し、復旧を試みたが、生活を再開させるには至らなかった。それに加え、国家の対応は占い等の宗教的行為のみで、具体的支援策は講じられず、地元の公共施設も対応がとれなかったことが考えられている（中摩ほか2019）。しかし、人々の避難先は発掘調査では確認できておらず、その後の生活痕跡をたどることは現状では難しい。そのため、成川式土器の最終段階である敷領式の終焉理由については、開聞岳の噴火による影響が大きいと考えられるが、この点についてはさらに分析を深めたい。

以上、成川式土器の成立から展開、そして土器様式の終焉までの様相を土器の分類・編年という手法を用いて検討してきた。結果、弥生時代後期から平安時代前半期の土器を10期に区分できるようになり、外来系遺物をもとにした併行関係についても整理することができた。

第4章では、成川式土器に付着したスス・コゲの観察を中心として、当時の調理技術の検討を行った。成川式土器の甕には、胴下部のコゲの付着が多く認められ、内面の胴中部付近にはパッチ状コゲが一定量観察された。土器に付着するススやコゲは、複数の調理の履歴を示すものであるから、使用方法について単純な推定はできないが、多くの個体に胴底部から下部にバンド状のコゲが付着すること、胴中部付近の側面加熱スス酸化やそれに対応するコゲの付着など、これまで指摘されてきたオキ火上転がしと共通の痕跡が確認できることから、成川式土器の甕を用いた調理は炊飯が主体であったことが推測される。

その一方、九州南部では少量ながらも古墳時代後期以降、蒸し調理に伴う甑が出土していることから、煮炊以外の調理方法も考慮する必要がある。先行研究をみると、鹿児島県域は、造り付け竈・移動式竈・甑の出土数が非常に少なかったため、「造り付け竈、移動式竈、甑のいずれもがその受容を拒否される」（杉井2004：p. 309）とあるように、基本的に蒸し調理は導入されなかったとする考え方が一般的であった。

しかし、近年の資料蓄積により、九州南部においてもある程度甑が確認されており（藤井2012）、新出資料をもとにした新たな解釈が必要である。さらに甑の出土数は増加する一方、杉井が指摘したように造り付け竈の検出数は非常に少ない。九州南部に蒸し調理が普及する際に、甑の情報だけが伝達され竈の情報は欠落したのか、竈の情報は到来したが受容を拒否したのかについては、不明な点が多い。

そこで、近年九州南部において甑が比較的多く出土した天神免遺跡の事例をもとに、甑

を使用した調理方法を復元した。天神免遺跡は宮崎県えびの市天神免に所在する古墳時代後期の大規模集落遺跡である（市田ほか編2010）。平成16～18年の発掘調査によって古墳時代前期～後期にかけての竪穴住居跡が197基検出されており、住居内には後述する「土器埋設炉」などの付帯遺構がみられる。住居平面は方形プランが主であり、竈などの炊事施設はみられない。

一般的に甑を使用するためには甑内底にスノコを敷き、水の入った甕の上部に設置する必要がある。基本的に、竈・甕・甑の3点セットで調理が行われる。しかし、天神免遺跡では造り付け竈・移動式竈は確認されていないため、竈を使用しない調理方法を想定しなければならない。そこで、以下の方法で分析を進める。

まず、天神免遺跡から出土した甑の形態ヴァリエーションを把握する。次に、甑と組み合わせる甕の形態ヴァリエーションを踏まえて、甑と甕のセット関係を分析する。さらに、甑のスス付着状況から、炉で使用した可能性を検討する。最終的には、天神免遺跡の事例をもとに、九州南部の甑の導入過程および使用方法を議論する。

分析の結果、分析結果から甑のスス下端径と整合性をもつ甕b類が甑と組み合わせる甕の可能性が高い。これは、甕a類のように器形がバケツ状を呈し、口縁部が内湾する甕では、同形の甑を設置しようとしても容器内に深く没入してしまい、蒸気を通す適切な器形とは言えない（岩崎1966、中村直2004）という従来の考えと整合性を持つものと言える。そのため、甕の上部に甑を乗せて使用する際には、甕b類のような屈曲した口縁をもつ器形が最も適していると考えられる。以上の点から、天神免遺跡の甑は竈を使用したのではなく、炉に甕bと甑を設置し、直接火を受けるような調理「炉を使用した蒸し調理」を行っていたことが想定される。次に、近年甑が多量に出土した天神免遺跡の事例をもとに、九州南部における甑の使用方法を復元し、その使用方法が九州南部で一般的なものか周辺地域の事例をもとに検討した。

周辺事例を整理した結果、九州南部で出土する甑はそのほとんどに突帯などの装飾が施されていることがわかった。これは、成川式土器の分布圏と重なっており、甕と甑という、器種は異なりながらも炊事に使用する器具については突帯を付すというなんらかの規範があった可能性を示している。そのため、これらの甑を「九州南部型甑」と呼びたい。

竈の分布範囲をみると、都城盆地から宮崎平野部にかけては造り付け竈が導入されており、脚台をもつ甕は極端に少ない。宮崎平野部では6世紀頃から造り付け竈が導入され、長胴甕と甑を組み合わせた基本的なセットで蒸し調理が行われている（今塩屋2004）。一方、大隅半島地域をみてみると、造り付け竈は現在のところ確認されていない。そのため、当地においても天神免遺跡同様、炉で甑を使用した方法が想定できる。ここまでみてきたように、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての九州南部の炊事具や火処は地域ごとで複雑な様相を呈していることがわかる。竈と甑が普及している宮崎平野部を中心とした場合、竈・甕・甑のセット関係は南にいくに従って、地理的勾配を持っており、その採用の仕方には地域差があることが明らかとなった。

第5章では、第3章において、成川式土器編年で最新の様式に位置付けられるのは敷領式であることが明らかとなった。敷領式は下に記す通り、紫コラ火山灰層と呼ばれる平安時代に噴火した開聞岳の火山噴出物によって直接埋没する例が知られている。この火山灰層は、文献史学、火山学、考古学の分野から年代推定研究が盛んに行われており、『日本三代実録』に収録された開聞岳貞観16年3月4日（西暦874年3月25日）噴火の被災記事と対応する噴出物であることが明らかとなっている（永山1992, 成尾1992, 下山1993）。

そのため、火山灰直下から検出される痕跡は、西暦874年3月25日当時の状態を示しており、考古学的に確度の高い鍵層となっている。さらに、災害の内容や災害への対応状況などを復元できる点で火山災害考古学研究へ資する影響は大きい。敷領式は紫コラ火山灰層によって埋没しているため、その下限年代も874年という年代が考えられてきた。

しかし、近年の発掘調査成果の蓄積によって、紫コラ火山灰層直下の遺構から出土する土器の年代は8世紀後半から9世紀前半に位置づけられるものであり、被災年代である874年とは50年から100年ほどの年代的齟齬が生じる可能性が出てきた（松崎2018b）。よって、敷領式の年代も非常に不安定なものになってしまうため、敷領式が営まれた時期の社会復元に問題が生じてしまう。本章では、敷領式の年代を明らかにするために、指宿市内における貞観噴火災害遺跡の内容や出土遺物について整理を行い、その矛盾点の克服を目指す。

各編年に照らし合わせて分析を行なった結果、紫コラ火山灰によって埋没した建物跡から出土した遺物および紫コラ直下層から出土した遺物は、型式学的に8世紀後半から9世紀前半に位置づけられるものであった。これは、下山覚が橋牟礼川遺跡で実践した遺物の型式学的検討（下山1993）と同様の結果になったと言える。下山は、9世紀後半に位置付けられる遺物の不在理由については、橋牟礼川遺跡から敷領遺跡への官衙的施設の移動を理由に説明した。つまり、B期に位置付けられる官衙的様相をもった橋牟礼川遺跡から、C期の遺物が出土するであろう官衙的様相をもった敷領遺跡へ中心が移動し、9世紀後半の遺物は敷領遺跡で将来発見されることを予想したのである。

しかし、結果は、下山の予想とは異なり、敷領遺跡で良好な形で火山災害による埋没一括資料が蓄積されたにもかかわらず、橋牟礼川遺跡と同様に8世紀後半から9世紀前半に位置付けられる資料群であった。これらの矛盾を別の角度から検討するために、次節からは紫コラ火山灰の直下から出土した炭化物をもとにした放射性炭素年代測定結果について記述する。

これまで、指宿市教育委員会では、紫コラ火山灰直下から出土した炭化物について、積極的に放射性炭素年代測定を実施してこなかった。その理由は、自然科学的な年代測定よりも正確に年代を知ることができる紫コラ火山灰という鍵層があったからにはほかならない。

しかし、紫コラ火山灰の降下年代に関する問題浮上してからは、紫コラ火山灰の年代について、多角的にアプローチする必要性が指摘され、近年は積極的に年代測定分析を行う

よう努めている。ただし、後述する放射性炭素年代測定法を用いた分析だけでは、得られる年代に幅があるため、求められた年代値が本研究課題の50年から100年の年代齟齬を解決するとは考えていない。それでも今ある研究素材を用いて複数試料の分析から、噴火年代を検討することは、意義のあることだと言える。以上のような視点に立って、本節では、近年実施した年代測定結果について説明する。

敷領遺跡から得られた炭化物について、包含層出土のもの、紫コラ火山灰によって埋没した建物跡から出土したものを対象試料として年代測定をおこなった。結果、包含層出土のものが建物跡出土のものよりやや古めの値を示していることが明らかとなった。より火山灰の年代に近いものは建物跡から出土する炭化物であると考えられることから、この結果は当然のものと考えられる。

建物跡から出土する炭化物は、中央値で664年から818年という値を示した。暦年較正年代では、874年の値も含まれる場合もあるが、中央値は9世紀前半を指している。今後も試料蓄積を継続する必要性はあるが、得られた年代測定値はおおよそその土器の年代（8世紀後半から9世紀前半）と整合的であると言える。

以上の点を整理し、出土遺物と火山災害年代の間に齟齬が生まれる点について、①出土土器伝世品説、②孤立した指宿の古代社会説、③建物埋没プロセス誤認識説、④土器編年錯誤説という複数の理由を考えた。しかし、いずれの理由についても可能性が低く、文献史学、火山学、考古学から導き出された年代齟齬は解消することができなかった。これまでの先行研究の膨大な蓄積を無視した年代批判は非常に危険であるため、この点は将来解決されることをまちたい。そこで、成川式土器の下限年代については「8世紀後半から9世紀前半に位置付けられる可能性もあるが、9世紀後半までを含んだ年代幅」で理解したいと思う。今後の課題は、自然科学的な年代測定を継続していく点はもちろんのこと、資料が遺存するかは不明だが、年輪年代測定も用いた年代測定を実施していく必要がある。

第6章では、近年の発掘調査の成果をもとに九州南部における古代遺跡の概要を説明し、当地域の古代社会における大きな画期である窯業生産について整理を行った。その上で、南さつま市に所在する中岳山麓古窯跡群に着目し、分布調査を通して、生産規模や器種、流通範囲について考察を行った。

#### (1) 窯の立地と生産規模

これまで中岳山麓古窯跡群では5ヶ所の支群を確認していたが、今回の分布調査で少なくとも新たに6つの地点において窯が営まれていたことが明らかとなった。

先行研究では中岳山麓における窯跡は、中岳南西部の標高20m範囲に集中していたが、今回の調査によって標高11m～85mの広範囲に窯が構築されていたことがわかった。中岳山麓では標高100m以上の地形は砂岩の岩盤が露出する地形であり、急傾斜地が続くことから、窯を構築可能な範囲内で操業していることがわかった。よって中岳山麓古窯跡群の範囲はさらに広いことがわかり、生産規模も従来考えられていたよりも大規模であった

と言える。

また、採集地点ごとに周辺地形を観察すると、旧耕作地に削平される形で灰原が露出している場合が多い。しかし、倉谷第1支群・第2支群については上記のような削平が及んでおらず、窯跡が残存している可能性が高い。その理由として、両支群の周辺地形を観察すると、須恵器が密集する地点の斜面にわずかな窪みがみられる点が挙げられる。このような斜面地におけるわずかな窪みは、地下式窯もしくは半地下式窯の埋没痕跡である可能性が指摘されており（木立2012）、中岳山麓古窯跡群においても同様の埋没痕跡が地表面に現れている可能性がある。この点については今後の発掘調査結果と合わせて考える必要があろう。

上村俊雄が行った過去の分布調査では、荒平第2支群における東側斜面の断面観察によって5基の窯跡が確認されている。現在発掘調査がおこなわれている同支群西側斜面では、少なくとも1基の窯跡が確認されていることから、単純な計算ではあるが、一つの支群でおおよそ5、6基の窯が築かれていた可能性がある。

つまり、今回の分布調査結果を参考にすると、中岳山麓窯跡群では少なくとも50基以上の窯が構築されていた可能性もあり、古代の九州南部では最大規模の窯跡であると位置づけられる。

## (2) 生産器種

過去の分布調査では、甕・壺のみが採集されていたことから、中岳山麓古窯跡群では貯蔵具類を中心に生産していたことが考えられていた（中村<sub>直</sub>2014）。しかし、今回の調査によって、新たに発見された支群も含めた各支群において、採集量は少ないながらも椀などの供膳具の存在が確認されている。そのため、本遺跡においては、貯蔵具である甕と壺に加えて、供膳具である椀も生産していたことが新たに分かった。

既知の支群も含め、今回の調査で採集した須恵器の器種について支群ごとにまとめ、グラフ化した。このグラフでは採集したすべての須恵器片の分類、計数を行い、採集量に対する器種別の比率を表したものである。この比率が支群における生産器種の比率に直結するものではないが、支群ごとの生産器種の様相を類推する上では有効であると考えられる。以下の記述からは、採集量が10点に満たない荒平第4支群、荒平第5支群、横道第1支群をのぞく。

グラフをみると各支群において甕が70～80%、壺が10～20%、椀は10%も満たない割合であることがわかる。甕・壺の採集比率を比較すると、甕の採集量が圧倒的に多いが、これは大甕などの大型品は破片数も多くなることによるもので、生産個体数をそのまま反映しているわけではない。生産個体数については採集資料と発掘調査出土資料との比較を通して検討する必要がある。

また、先述したように丸尾地点においては土師器の採集量が全体採集量の四分之三を占めている。他の地点で土師器が採集されていないこと、杯などの供膳具だけでなく、甕といった煮炊具も採集されていることを考えると、窯業に関連する施設があったと考え

るほうが妥当であろう。

以上の点から、中岳山麓古窯跡群は、同時期における九州南部最大の須恵器窯跡であることがわかり、甕・壺といった貯蔵具類だけでなく、椀といった供膳具も生産されていたこと、須恵器にみられる当て具などの製作具痕跡から、複合的な技術導入の可能性を指摘した。中岳山麓窯跡群のような大規模な生産体制を構築するためには、専門工人の介入や入植は不可欠であり、9世紀段階において「在地伝統」的集落や土器生産体制への影響は大きかったことを考えた。

第7章では、これまでの検討結果を基礎にして、成川式土器の終焉プロセスを明らかにするために、笹貫Ⅰ式から敷領式にかけての「在地伝統」的要素をもつ集落動態と、「律令制国家」的要素をもつ集落や施設の普及状況を比較した。笹貫Ⅰ式段階では、基本的に古墳時代からの伝統を引き継ぐ「在地伝統」的要素をもつ集落のみで構成されていた。

続く笹貫Ⅱ式段階では、成川式土器を主体とする集落が分布範囲を狭め、指宿地域と大隅半島地域に限定されるようになる。一方で、北薩地域や鹿児島湾奥部、薩摩半島西岸域では、集落の存在が希薄となる状況が確認された。笹貫Ⅲ式段階になると、成川式土器の分布圏はさらに狭まり、指宿地域と志布志湾沿岸部に限定されるようになる。また、器種構成にも変化が起き、煮沸具は在地伝統をもつ成川式土器、供膳具は土師器や須恵器に置き換わる現象が認められる。

笹貫Ⅲ式における大きな変化は、7世紀後半に大島遺跡、8世紀前半に京田遺跡や柳ガ迫遺跡、城ヶ崎遺跡といった国府・国分寺周辺の集落が出現することである。この地域は笹貫Ⅱ式の段階で、明確に在地集落を確認できなかった地域であり、ある程度の集落断絶を挟んで「律令制国家」的要素をもった「類型Ⅲ」に位置づけられる集落が出現したと考えた。最終段階の敷領式段階では、「類型Ⅲ」にあたる集落が九州南部の広い範囲で見られるようになる。在地伝統を残す地域は指宿地域のみであり、その伝統も脚台甕にみられるだけになった。薩摩半島西岸においても、中岳山麓古窯跡群が成立するなど、窯業生産の確立や流通網が発展した。このような社会動向の中、成川式土器の伝統を最後まで存続させていた指宿地域においても、9世紀に起こった開聞岳の火山噴火によって、その伝統は失われることになった。

ここまで笹貫Ⅰ式から敷領式における土器動態について、第3章から第6章まで実施した様々な分析結果と、「律令制国家」的要素と「在地伝統」的要素をベースにした類型を用いて、成川式土器の終焉の様相を検討してきた。

これまでの分析結果を振り返ると、成川式土器は古墳時代初頭に成立してから以降、常に外来系文化の影響を受けつつ、模倣や変容を繰り返しながら、在地土器様式を構築してきたことが指摘できる。成川式土器に常に影響を与えたのは前方後円墳を中心した古墳祭祀に伴う土器文化であったことは間違いないが、影響を受ける器種もあれば在地伝統を墨守する器種もあり、大きな社会変化や生活様式の転換は起きなかった。その証拠に、

弥生時代以来、脚台甕は基本的な形や使用方法に大きな変化がなく、平安時代までその伝統が残っていたことがあげられる（鐘ヶ江ほか2014）。この状況は、「外来土器文化に対して排他的だったわけではなく、他地域の土器情報を受容しつつ変容させ、独自の生活様式に即した土器文化を形成している」（中村2021：p. 85）という中村直子の指摘とも調和的だと考える。

しかし、上記の「多様性の範疇で捉えられてきた九州南部の諸様相」（橋本2012c：p. 137）も古墳時代後期以降、前方後円墳の築造が停止したことにより、古墳築造のネットワークや他地域との交流、政治関係などが絶たれ、「九州南部は新たな文化・情報から乖離し、個性化の道を進んだ」（橋本2012c：p. 137）ことが示された。

笹貫Ⅰ式以降、独自の文様をもつ壺やデフォルメが著しい供膳具類などが登場し、在地色の強い土器文化を形成した。いわゆる「成川式土器」の特色はこの段階で形成されたものと考えられる。しかし、笹貫Ⅱ式に入ると、成川式土器分布圏の縁辺部では古墳時代中期以降に全国で普及する蒸し調理を受容・変容させて「炉を使用した蒸し調理」を構築するなど、単純な個性化の道を進んだわけではないこともわかってきた。

そして、律令国家形成期にあたる7世紀後半以降、九州南部では在地集落が希薄だった北薩地域や鹿児島湾奥部に「律令制国家」的集落が出現する。と同時に、成川式土器の分布圏も狭小化するようになる。薩摩川内市に大島遺跡が出現すると、矢継ぎ早に国府・国分寺周辺遺跡の整備が進み、移民政策などの後押しもあり、ヒト・モノ・情報の流入による社会的・政治的変革が起きた。指宿地域や志布志湾沿岸に残った「在地伝統」的集落に視点を転じると、「律令制国家」的要素の流入に対し、疎外や抵抗などの姿は見えず、供膳具類を中心に在地土器様式のなかへ直接導入している様子を確認できる。

つまり、古墳時代に見られた模倣や在地化は顕著ではなく、自らの飲食形態を変更した受容形態が看取できる。ただし、煮炊具については伝統を保持している様子が確認でき、この時点から「類型Ⅱ」に位置づけられる土器組成がみられるようになった。これは、先行研究において、笹貫式を最後に在地土器様式が途絶し、外来の土器様式へ劇的に転換したという議論（中園1988）とは異なる様相であることが指摘できる。

成川式土器の最終段階である敷領式については、指宿地域において煮炊具において「律令制国家」的要素を取り入れた丸底土師器甕を導入しており、弥生時代から続く脚台甕の伝統は、非常に空疎なものになっていた。成川式土器にみられる伝統は、9世紀代に位置づけられる時期に、開聞岳の火山噴出物「紫コラ火山灰」によって、完全に埋没し、居住域や耕作地を含めた集落全体が甚大な被害を受けた。復旧を試みるも復興には至らず（鷹野ほか編2014）、ついに開聞岳の火山災害以降、成川式土器の伝統は失われてしまう。

先行研究では、成川式土器の終焉と古代土師器の流入については断絶が大きく、律令制導入に伴う様々な諸制度の導入や移民政策など一方的な社会転換が想定されてきた。しかし、本研究の提示によって、九州南部全体がドラスティックに転換したのではなく、いくつかの段階を経て、在地土器様式の変化を促していたことが明らかとなった。

まず一つ目の段階が笹貫Ⅰ式段階であり、前方後円墳の築造停止による古墳文化とのネットワークが断絶したことによる情報量の低下や外来文化との接触機会が著しく失われた段階である（橋本2012c）。この段階では、在地集落は成川式土器のみで構成されており、基本的に須恵器や土師器の受容は限定的であった。

二つ目の段階は、笹貫Ⅱ式段階であり、土器様式の狭小化がみとめられ、北薩地域や鹿児島湾沿岸部の「在地伝統」的要素をもつ集落が希薄になってしまう段階である。この理由は定かではない。外来文化との疎遠化が笹貫Ⅰ式段階から進行したことを説明したが、この段階では、隣接地域との交流や情報伝達をもとに「炉を使用した蒸し調理」を成川式土器様式圏の縁辺部で導入している。

三つ目の段階は、笹貫Ⅲ式段階であり、薩摩・大隅国府周辺の「律令制国家」的要素をもつ施設や集落の建設や普及が急速に進む。これらの集落は、笹貫Ⅱ式段階において集落が希薄となった地域に浸透しており、律令制の普及を円滑に推進させる目的があった可能性が考えられる。笹貫Ⅲ式段階の社会変化によって、薩摩半島や大隅半島の一部に残存した「在地伝統」的集落においても、供膳具類については「律令制国家」的要素を取り入れるなど、徐々に食器組成や飲食形態を変化させていることがわかる。

つまり、この段階において、律令制の普及は薩摩・大隅国府周辺の「急進型」と、指宿地域や志布志湾沿岸の「漸進型」の2つの系統があったと考える。律令制普及のために、中心的な役割を果たす国府周辺域に注力した結果、上記2つの社会変化系統が生まれたと考えられる。

そして、四つ目の段階である敷領式段階に入ると、指宿地域を残して、「在地伝統」的要素は完全に失われてしまう。薩摩半島西岸域においては、中岳山麓古窯跡群が大規模な操業を開始し、九州外や古代国家の領域外まで流通網を敷衍化していることや「律令制国家」的要素を持つ集落が急増していることを考えると、7世紀後半から始まった古代国家形成期における様々な社会変革は「律令制度の普及・確立期」（川口2018：p. 14）を迎えたと言える。

敷領遺跡では、これまで在地伝統を墨守してきた煮炊具や調理施設にいたるまで、「律令制国家」的要素が波及している状況を確認できる。成川式土器に見られる「在地伝統」的要素が、なぜ指宿地域だけに残ったかについては、今後の課題としたいが、9世紀代に至るまでその伝統を残し、「律令制国家」的要素と共存していた現象を考えると、そこには土器様式の断絶や征服的な土器様式の転換は認められず、在地伝統と新来文化のバランスを保ちながら対応していた在地民の姿を想定することができる。そして、開聞岳の噴火が起き、指宿地域を中心に「在地伝統」的要素は完全に紫コラ火山灰に埋もれてしまった。火山災害後も敷領遺跡に居住した人々は生活復旧を試みるが、厚く堆積した火山灰に阻まれ、ついには復興を断念してしまう。火山災害から避難した人々が再び成川式土器を製作したかについては、現段階では明らかではないが、紫コラ火山灰による被害で、古墳時代初頭から約600年続いた成川式土器の伝統は失われてしまうことになった。

## 主な参考文献

- 今塩屋毅行 2004「南部九州古墳時代の火処―「土器利用炉」に着目して―」『福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念―』小田富士雄先生退職記念事業会 pp. 517-546
- 岩崎卓也 1966「甗小考」『信濃』第18巻第1号 pp. 227-245 信濃史学会
- 川口雅之 2018「古代の薩摩・大隅国、多禰嶋における律令制度の普及―考古学の研究成果から―」『縄文の森から』第10号 pp. 1-18 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 久住猛雄 2015「「土師器」の中の「成川式」土器―中津野式から辻堂原式にかけて―」『成川式土器ってなんだ?―鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器―』pp. 67-84 鹿児島大学総合研究博物館
- 下山覚 1993「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる編年的考察―「日本三大実録」貞観16年7月29日条についての考古学的アプローチ―」『古文化談叢』第30号 pp. 1179-1193 九州古文化研究会
- 下山覚 1995「考古学からみた隼人の生活―「隼人」問題と展望―」新川登亀男（編）『西海と南島の生活・文化』pp. 169-199 名著出版
- 杉井健 2004「前方後円墳分布圏とその周辺における生活様式伝播の多様性」『文化の多様性と比較考古学』 pp. 307-314 考古学研究会
- 田中良之 1982「磨消縄文土器伝播のプロセス―中部九州を中心として―」『森貞次郎先生古稀記念古文化論集』上巻 pp. 59-96 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 田中良之・松永幸男 1984「広域土器分布圏の諸相―縄文時代後期西日本における類似様式の並立―」『古文化談叢』第14集 pp. 81-117 九州古文化研究会
- 中島恒次郎 2010a「城久遺跡群の日本古代中世における社会的位置―津軽石江遺跡群との相違を含めて―」ヨージェフ・クライナー・吉成直樹・小口雅史（編）『古代末期の境界世界―城久遺跡群と石江遺跡群を中心として―』pp. 131 -160 法政大学国際日本学研究所
- 中島恒次郎 2010b「薩摩・大隅・南島における古代中世の社会像構築にむけて―考古資料を用いて―」『鹿児島地域史研究』No. 6 pp. 36-48 鹿児島地域史研究会
- 中島恒次郎 2015「土器から考える遺跡の性格―大宰府・国府・郡家・集落―」『官衙・集落と土器1―宮都・官衙と土器―』pp. 93-130 奈良文化財研究所
- 中園聡 1991「甕棺型式の再検討」『九州考古学』第66号 pp. 1-28 九州考古学会
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 pp. 57-76 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子 2009a「7・8世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考』中巻 pp. 119-128 南九州集縄文研究会、新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 中村直子 2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ?―鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器―』pp. 25-30 鹿児島大学総合研究博物館
- 永山修一 1992「『日本三代実録』に見える開聞岳噴火記事について」下山覚・渡部徹也（編）『橋牟礼川遺跡Ⅲ』 pp. 501-510 指宿市教育委員会
- 永山修一 1992「『日本三代実録』に見える開聞岳噴火記事について」下山覚・渡部徹也（編）『橋牟礼川遺跡Ⅲ』 pp. 501-510 指宿市教育委員会

永山修一 2009『隼人と古代日本』同成社

永山修一 2011「大隅国桑原郡に関する若干の考察－柳ガ迫遺跡の理解のために－」深野信之（編）『柳ガ迫遺跡』始良市教育委員会

成尾英仁 1992「橋牟礼川遺跡の地質」下山覚・渡部徹也（編）『橋牟礼川遺跡Ⅲ』 pp. 511-522 指宿市教育委員会

平田信芳 1979「隼人が用いた土器－成川式土器－」『隼人文化』第5号 pp. 34-44 隼人文化研究会

藤井大祐 2012「大隅・薩摩の諸勢力と体外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の体外交渉』 pp. 575-593 第15会九州前方後円墳研究会北九州大会実行委員会

横山浩一 1985「型式論」『岩波講座日本考古学1』 pp. 43-78 岩波書店